

上田小県地域の青年団活動と「社会的教養」

—『西塩田時報』を中心に—

A historical study of the *Seinendan* (Young Men's Association) movement and social culture in the Ueda-Chiisagata district : A case study based on the *Nishi-Shioda-Jihou* monthly paper.

長 島 伸 一*

Shinichi Nagashima

1. はじめに——課題の限定

大正後期から昭和戦前期にかけての上田小県地域における農村青年の文化活動や社会運動の出発点になったのは、児童自由画運動、農民美術運動、信濃黎明会の普選と軍縮を求める政治運動、信濃（上田）自由大学運動などであった。このうち1910年代後半に始まった前2つの運動では、提唱者の山本鼎を物心両面から支えた農村青年として、小県郡神川村の金井正と山越脩蔵の2人がよく知られている。また、1920年代初頭に、山越と上田市の猪坂直一は信濃黎明会の会員になっているが、やがてそれぞれ修養部長、宣伝部長として活動している。さらに、神川村および上田市で哲学講習会を主宰した山越を介して3人が合流して、1921年11月に信濃自由大学の開講を迎えることになる。信濃自由大学がその教育目標として掲げたのは、受講生たちが「自己教育」を行うことを支援することによって、一人ひとりが「社会的教養」に裏打ちされた「自立的人格」を身につけ、それを武器にして地域の「改造」をめざすということであった¹⁾。

5期連続で自由大学が開講された1920年代の前半期は、この同じ上小地域の青年団が「村の新聞」として『時報』を創刊した時期とも重なって

いる。小県郡における『時報』発行のピークは、郡内3町30村のうちの15村で『時報』が創刊された1924—25年であるが、最も発刊が遅れた『傍陽時報』を唯一の例外として、長窪古町を除く他の全ての町村の『時報』は1920年代にその刊行が始まっている（40、41頁の表1および地図を参照）。平成の大合併以前の旧上田市に戦後編入されていった14村の中で、比較的創刊の遅かった『別所時報』や『殿城』でも、発刊ピーク時とほぼ時を同じくして創刊されているから、各『時報』には、途中2年間の中断を挟んで1930年1月まで開講された自由大学関係の記事が散見されるのでは、という期待をもつのはある意味で当然であろう。しかし、青年団の機関紙『時報』が自由大学に言及するのはむしろ稀であって、その期待は裏切られる²⁾。

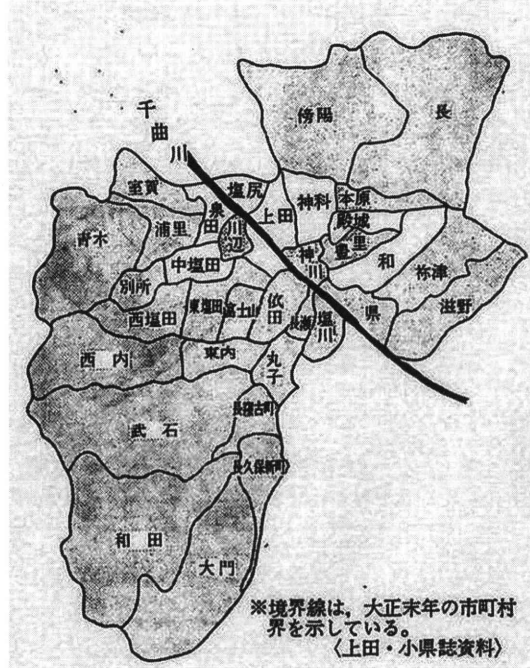
それでは、上小地域の青年団と、あるいは彼らが発行した『時報』と自由大学運動とはほとんど接点がないと言えるであろうか。そうは言えないという立場から、時報『神川』を祖上にのせ、学習集団「路の会」のメンバーに焦点を当てて「自由大学運動と青年団運動の位置と役割を明らかにする作業」にきっかけを与えたのが渡邊典子の論稿である³⁾。『神川』一紙のしかも1933年までの論説の分析に限られた研究ではあるが、貴重な聞き

*環境ツーリズム学部教授

〔表1〕 上小地方の『時報』発行年と市町村合併史

別所村	別所時報 (1926)								
西塩田村	西塩田時報 (1923)								
中塩田村	中塩田時報 (1924)			1956年					
富士山村	富士山時報 (1925)	1949年		塩田町					
東塩田村	東塩田時報 (1925)	東塩田村			1970年				
泉田村	泉田時報 (1924)								
神川村	神川時報 (1924)			1956年				上田	
川辺村	川辺時報 (1925)			上田市				上田	
塩尻村	塩尻時報 (1919)		1954年					上田	
上田市	上田青年 (1928)	上田市	上田市					上田	2006年
神科村	神科時報 (1924)				1957年				
殿城村	殿 城 (1927)			1956年		1958			
豊里村	豊里時報 (1923)			豊殿村		年			上
浦里村	浦里村報 (1921)			1957年		1972年			田
室賀村	室賀村報 (1924)			川西村					市
本原村	本原時報※ (1919)	※前身は「烏帽子之華」				1958年			
傍陽村	傍陽時報 (1937)					真田町			
長村	長村時報 (1924)								
塩川村	塩川時報 (1924)								
依田村	依田村時報 (1925)			1955					
長瀬村	長瀬時報 (1928)			丸		1956年			
丸子町	丸子時報 (1928)		1954年	丸		丸子町			
東内村	東内時報 (1929)			子					
西内村	西内時報 (1924)			町					
武石村	武石時報 (1923)					武石村			
青木村	青木時報 (1921)								青木村
県村	県村時報 (1926)	1953年田中町に改称			1956				
和村	和 時 報 (1924)				東部町	1958			2004年
禰津村	禰津時報 (1924)					東部町			東御市
滋野村	滋野時報 (1927)								
和田村	和田時報 (1925)					和田村			
長久保新町	長窪時報 (1929)					1956年			2005年
長窪古町	——					長門町			長和町
大門村	大門時報 (1928)								

大正末・昭和戦前期の上田小県地域



『上田小県誌』第5巻、496頁

取り調査に基づいて⁴⁾、青年団の役員や『時報』の執筆者と自由大学の受講者とが人的にオーバーラップすることを明らかにし、自由大学研究への新たな視点を提供した点で、この渡邊の一連の論文はその後の研究に道を拓いたものと評価することができる。

にもかかわらず、その後の『時報』研究は、自由大学研究への新たな架橋を試みるものにはなっていないように思われる。そこで本稿では、まず初めに、これまで多くの研究者によってそれぞれ個別の関心から利用されてきた4つの史料を、新たな視点から再検討する必要性を確認したい。その上で、青年団の役員や『時報』編集者、執筆者とそれら4史料とを重ね合わせることによって、上小地域の青年団運動が、信濃黎明会の会員や自由大学の受講者たちの少なからぬ部分によって担われていた事実を明らかにする。そして、最後に主として『西塩田時報』に拠りながら、青年団運動と自由大学の精神との両者が相俟って地域の社会的教育力がどのように育まれていたのか、換言すれば青年団運動と「社会的教養」との関連について検討することにしたい。

2. 『時報』研究の前提としての4つの史料

そこです、これまで蓄積されてきた自由大学研究⁵⁾からさらに一步を踏み出すために、あるいはそれとは相対的に独自に進められてきた『時報』研究に新たな視点を盛り込むために、従来からその存在が知られてきた4つの史料の価値を再確認しておこう。

4つの史料とは、それぞれ「信濃黎明会記録」、「信濃自由大学会計簿」、「自由大学雑誌発送簿」および「上田自由大学会計簿」である。

このうち「信濃黎明会記録」だけは活字にされている⁶⁾。「信濃自由大学会計簿」と「自由大学雑誌発送簿」は、これまで幾つかの論文でその存在が指摘されてきてはいるが、現在はその複写が残されているだけで本体の所在は明らかではない。他方「上田自由大学会計簿」は、現在、長野大学附属図書館に所蔵されている。

これら4つの史料に共通な点は、信濃黎明会と自由大学およびその機関誌に関わりをもった個人会員名の一部が記載されている点である。従来は、2つの組織（あるいは厳密に言えば自由大学協会を加えた3つの組織）の実態（会議内容、会計状況、開講日や参加者数、発送先など）を明らかにするためにこれらの史料が利用されてきたのであって、個々の会員への注目は全く払われてこなかった。しかし、同じ史料を別の角度から眺めれば、興味深い事実が浮かび上がってくる。すなわち、これらの組織の会員と『時報』の関係者、すなわち青年団役員や『時報』記事の執筆者とが、かなりの程度に交叉する点を確認できるというのがそれである。先に指摘した渡邊論文では、当時存命だった関係者からの聞き取り調査を踏まえてその点を明らかしようとした労作であるが、もはや聞き取りのできない現在にあっても、これらの史料と『時報』の記事とを重ね合わせることによって、神川村ばかりでなく上小地域全体に亘るその相関関係をあぶり出すことが可能なのである。

現在準備中のそれらの本格的な分析結果は、もちろんそれだけで膨大なスペースを要するから、別稿に譲らざるをえない。そこでここでは、そのエッセンスだけをかいつまんで確認しておきた

い。それは以下のとおりである。

信濃黎明会の会員であった猪坂直一、山越脩蔵は言うでもなく、例えば宮下智三郎（上田市）、松前五七郎（同）、中沢守平（城下村、1921年に上田市に合併）、清水実（本原村）、宮下周（浦里村）、南條三二郎（別所村）、横関豊龍（和田村）は自由大学の受講者であると同時に『自由大学雑誌』の購読者であった。また宮川源太（上田市）、飯島廣（同）、沓掛喜（塩尻村）、小林泰一（川辺村）、清水良平（本原村）、塚原彦太郎（神科村）、柳沢賢次郎（武石村）も『自由大学雑誌』の購読者に名を連ねている。彼らの中には、村の青年団や小県郡、長野県の連合青年団活動を経て、のちに村長や県会議員（南條三二郎、宮下周）、助役（沓掛喜）になるものも含まれており、各村の『時報』の執筆者として紙面を賑わしているものが多い。

信濃自由大学の受講者の中には、上田市の等々力直泰、田中勝五郎、神川村の金井栄、神科村の清水架娑信、池田正雄、塩尻村の中島忠次、佐藤彰二、殿城村の青木猪一郎、浦里村の渡辺豊貞、東塩田村の宮原征清、別所村の西島均一らの名が含まれている。このうち、神科の清水、塩尻の中島はのちの村長経験者である。他方、1928年に再建された自由大学の受講者には、例えば神川村の矢島二郎、山辺聖、山浦英治、神科村の藤沢功、金井幸男、横沢要、中塩田村の塩沢平八郎、浦里村の横山勇司、泉田村の小泉謙介、石井泉、赤羽光利、久松定勝らが名を連ねている。彼らは青年団長ないし副団長として、また小県郡連合青年団長や副団長としても活動していたことが『時報』の記事を通して浮かび上がってくる。このうち石井は、のちに泉田村長、上田市長を歴任している。また、彼らは、当然のこととして自らの論説を執筆して『時報』紙上を賑わしている。

ところで、再建自由大学の発起人・世話人には石井清司（泉田村）、細田延一郎（豊里村）、堀込義雄（神川村）、山浦国久（同）が名を連ねている。このうち、細田と堀込は信濃自由大学も受講している。かれら4名は青年団長の経験者であるばかりでなく、例えば信濃自由大学第1期の講師であった世良寿男、大脇義一の講義ノートを遺した細田は、のちに豊里村長になり、豊里と殿城が

合併した際にも豊殿村長に就いている。小学校の教員であった堀込は、青年団長として『神川』で健筆を振るったあと、神川村長、県会議員、上田市長を歴任している。

さらに『自由大学雑誌』の購読者の中にも、例えば塩尻村の沓掛正一のようにのちの県会議員歴任者や、塩尻村の佐藤嘉三郎、佐藤八郎右衛門、原理兵衛、中塩田村の遠藤要蔵、富士山村の峯村嘉孝、別所村の斎藤房雄のような、のちの村長経験者が含まれている。佐藤嘉三郎は、最後の自由大学講義（1930年1月）の会計が赤字になった際に大枚100円を貸与している。彼らもまた、若き時代には青年団活動の中核を担い、『時報』の紙面を通じて自らの見解をたびたび表明している。

前稿〔注1〕を参照）でも触れたように、自由大学運動の評価にあたっては、その受講者たちが「その後地域の運動にどういふ影響を与えたのか」という視点が欠かせない⁷⁾。そのためにも、2つの「会計簿」に含まれている受講者リストを傍らに置きながら『時報』の記事を分析する作業が必要になる。各村の『時報』は1940年末に廃刊を余儀なくされたあと、戦後1年足らずのうちにほぼ復刊され1955年前後に行われた町村合併まで発行されているから、若き青年団員のその後の社会的活動を追跡するには、看過することのできない歴史的な資料といえるのである。

3. 『時報』の使命と青年団活動の重層性

その点を再確認した上で、上小地域の市町村で発行されていた『時報』の使命と、青年団にとって『時報』のもつ意義との検討に移ることにしよう。『時報』の発行に込められた目的はどのようなものであったのだろうか。この地域で比較的早く発刊された『青木時報』の創刊号には、その理由が次のように記されている。

「吾々は、自己の生活をよりよくするために先づ最も近い社会生活の団体としての村を愛さねばならない、理解せねばならない。理解するためには知る事である、理解せしめるためには知らせる事である。茲に吾々青年会が青木時報を発行するのは、その仲介機関たらんためである」⁸⁾。

見られるように、『時報』は、青年団が「仲介」となって村の現状を「知らせる」ことによ

て、村民が村を「理解」し生活を改善するための「導きの糸」として発行された。正確な報道なくして村の改造は望めない。村民の「知る」権利をまずは保障することによって、「社会生活」の最小単位としての村の生活の改造を図る。そういう使命を帯びて『時報』は創刊されたのである。

上小地域で『時報』が創刊ラッシュを迎えていた1924-25年には、例えば『神科時報』によって、「今や時報は時勢の推移、日進の大勢に順応した適切な事業」と確認されている。その上で、同時報は「村の行政、教育、経済状態を各人に徹底的に知得せしむる」ために創刊されたと述べている⁹⁾。また、『川辺時報』は自らを「村の生活態を基礎としてそこに生れた出来事を多少時間は要するも正確に報道し研究する、村自治の融和と向上とを使命とする機関」と位置づける。その上で同時報は、「村内に於ける公私公益機関の事業報道、或は全村民の叫び、時事問題、評論より倫理道徳の振作に至る迄で、自由に大胆に理性の発動するがまゝに厳正公平、当に不偏不党相互了解の下に村自治の発展と充実に貢献」することを自らの使命としている¹⁰⁾。

確かに『時報』は「村の生活態」を活写しており、年中行事や風俗習慣など農村生活史を辿る上で貴重な素材を提供してくれる。また「村の行政、教育、経済状態」の記録が盛り込まれているため、人口動態や土地利用状況をはじめとする村勢一覧や財政状況、役場日誌、小学校からの連絡や中等学校への進学状況、村内各部落の蚕の掃立枚数などを含む養蚕業の実態、農会・信購組合・産業組合などの事業報告、農業や養蚕業に関する啓蒙記事、養鶏や養鯉など副業振興のための先進地視察報告など、細部にわたる記事が満載されており、戦前期の社会史研究の宝庫と見なすこともできる。加えて「全村民の叫び、時事問題、評論」などが、自由闊達に紙面を賑わせており、とりわけ農村青年の政治意識や社会認識の在りかを探るうえで、欠かすことのできない史料ともなっているのである。

本稿の後半では、その最後に指摘した農村青年の時論や評論を手掛かりにして、それらと自由大学がめざした「自己教育」による「自律的人格」や「自己決定」力の養成との関連を探ることにあ

るが、その前提としてここで当時の青年団活動の重層構造を、2年前の大型合併以前の旧上田市を中心に確認しておきたい。

旧上田市域には、1921（大正10）年に城下村が上田市に合併されたあと、14の村が存在していたが、その前後に村の青年団、小県郡連合青年団（郡連青、1920年2月）、長野県連合青年団（県連青、1921年10月）が設立された。本稿が対象とする西塩田村の場合でいえば、明治時代に旧村単位で設立されていた青年団と西塩田夜学校とが合併して1920年3月に西塩田青年団が創設され¹¹⁾、旧村青年団は、青年団支部に編成替えされている。また、1929年5月には、西塩田村のほか別所村、中塩田村、東塩田村、富士山村の間で、塩田5ヶ村連合青年団も設立された¹²⁾。

こうしてみると、青年団は、最小単位の支部青年団から、村一塩田5ヶ村一郡一県と同心円的に拡大していき、いわば重層的に組織化されていたことがわかる。『西塩田時報』には毎号「支部通信」が掲載されており、海外を含む村外居住の村関係者にとって、それが懐かしい情報欄となっていたことは、投稿記事からも読み取ることができる。しかし、支部や村の青年団員から見ると、県連青はどちらかといえば疎遠な存在であった。じっさい県連青の情報は、その綱領の修正問題に揺れた1937年のひと時を除けば、『時報』の話題を賑わすことはあまりなかったといえる。

しかし、のちに指摘するように、県連青の綱領には、「自主的精神に立脚して社会事象の研究と厳正批判とをなし更に之が実践とにより以て社会的教養を積み社会文化の進展を期す」という一項が掲げられていたのであり、「自主的精神」、「社会事象の研究」「批判」「実践」、「社会的教養」、「社会文化の進展」などの文言は、村青年団や郡連青とも共通のキーワードであった。しかも、それらのキーワードは、信濃黎明会や自由大学の掲げた到達目標と齟齬をきたすことはなかった。官製の青年団に飽き足りない農村青年たちが設立した二つの運動体と、自主化を求めて再編された重層的な青年団との間に人脈的な相互交流関係が成立したのもけだし当然であった。

県連青に較べると、郡連青や塩田5ヶ村連青は、団員にとってもっとずっと身近な、団員相互

の「社会的教養」を積み上げる社会教育組織でもあった。というのも、郡連青は毎年11月に、5日間ないし6日間、別所の常楽寺で泊り込みの講習会を開いており、西塩田村からも各支部から1名ずつ交替でこれに参加する機会があったからである。また、毎年2月には、上田市公会堂において、丸1日かけて各村から提起された各種の研究問題を討議する郡団研究大会も開催された。例えば、世界大恐慌（1929年）のおおりの受け、また満州事変（1931年）後の言論統制を一気に加速することになった2・4事件〔教員赤化事件〕直後の1933年2月19日に開催された大会の研究問題は、以下のようなものであった。

◇ 青年団に関する問題 1) 郡連青講習会開催可否如何、2) 郡連青講習会批判、3) 自主的的青年団の再検討と現段階に於ける青年の目標如何

◇ 経済に関する問題 1) インフレーション政策批判、2) インフレーション景気は農村を如何にするか、3) 農村救済土木事業に対する見解如何、4) 現代農村更正策奈辺にありや、5) 不況対策更正会の農村に及ぼす影響如何、6) 金肥の低廉なる入手策如何、7) 農民の結束策如何

◇ 社会に関する問題 1) 満州移民問題批判、2) 村会議員選挙に対する青年の態度如何、3) 鳥潟博士息女結婚解消問題批判、4) 産業組合に対する青年の見解如何、5) 教員赤化に対する青年の見解如何

具体的な内容までは詳らかにしえないが、不況が蔓延し時代状況が右に大きく旋回する中で、青年たちが焦眉かつ喫緊の課題に対して「自由に大胆に」激論を戦わせる場面を想像できるような論点が列挙されている。10代後半から20代の青年たちは、各村での周到な準備を経て大会に臨み、政府のインフレ政策や満蒙開拓や教員赤化事件などの争点をめぐる討論に耳を傾けながら、各自の判断力を鍛える機会を自らもっていたのである。

これに対して塩田5ヶ村連青では、毎年3月に各村持ち回りの会場に150名程度（つまり平均すれば各村30名程度）が集まり、同様の研究大会が開催されている。郡連青の大会には参加人数を制限せざるをえない事情があったが、こちらは希望

者に開かれており、『時報』にはその盛会振りが伝わってくるような記事も残されている。自由大学もそうであったが、養蚕業が一区切りする農閑期は、青年団員にとって修養の時節でもあったのである。

4. 郡連青修養講習会とその一餉

このほか、毎年8月には同じ常楽寺を会場に4日連続の信州婦人夏期大学が開かれ、児童心理学者の高島平三郎、児童文学者の久留島武彦、哲学者の帆足理一郎や女性運動家の市川房江をはじめ山田わか、山高（金子）しげり¹³⁾などが講演をしているし、村の青年団や支部青年団でも農閑期には毎年かなりの頻度で講演会が開催された。その中には、信濃毎日新聞主筆の桐生悠々¹⁴⁾や北信毎日新聞社長の武市如意、かつて信濃自由大学の受講者や『自由大学雑誌』の購読者であった上田中学教諭の金井栄、小児科医の浅井敬吾、上田蚕糸専門学校の針塚長太郎や早川直瀬、蚕糸雑誌主筆の松前七五郎、県議員の宮下周らも含まれている。したがって、自由大学第一世代が地域の後輩の修養の機会に立ち会うことも、決して少なくはなかったのである。

しかし、何ととっても青年団員が「社会的教養」を積む上で大きな影響力を及ぼしたのは、郡連青主催の講習会であった。この講習会は、すでに指摘しておいたように、小県郡内3町30村の青年団代表が常楽寺に5～6日間泊り込みで合宿を張ったもので、100名を超える大所帯で行われている。とはいえ、各村からの参加者は3～5名程度に制限せざるを得なかった。西塩田村の場合は、地の利もあったため、毎年各支部から1名ずつ6名を送り込んでいるが、合宿後の12月には各支部で参加者による研究報告会を開催し、また参加者の代表が『時報』に講演要旨を掲載することによって、参加できなかった団員とこの貴重な機会を共有する仕組みも恒例化している。地域の「社会文化の進展」に寄与するために、村の青年団支部集会や『時報』の紙面を通して「社会事象の研究」の素材を提供し、地域の教育力向上をめざす枠組みが整えられていたと見ることができよう。

1923年以降、17年間の郡連青講習会の講師名と

その肩書は、下の表のとおりである¹⁵⁾。

一見して明らかのように、とりわけ1930年代初頭までは、自由大学のそれと決して引けをとらない錚々たる講師陣が名を連ねている。講義の時間に関しても、例えば外交評論家でのちの大戦中に『暗黒日記』を残した清澤冽の講義が合計「9時間」と記されているから、合宿形式のこの研修は、単発の講演会とは趣きを異にしたじっくりと物を考える機会を団員たちに提供したのではないかと考えられる。一例を紹介しよう。

『西塩田時報』には、3号に亘って1930年11月に開催された「資本主義社会の機構」と題する向坂逸郎の講義概要が掲載されている¹⁶⁾。講師の人選について当初は、2年前に上田自由大学で「経済学における哲学的基础」を講じた三木清の招聘案も検討されたようである。事情は不明であるがそれは実現されず、替わって向坂が招かれることになった。

向坂の講義は、「物質的生産力の発展変化するに随ひ、経済的構造もこれに伴って」変化するという唯物史観の解説から始まっている。「人類の形造る社会形態」には「商品生産の社会」と「意識的（或は計画的）の社会」とに大別できる点を確認した後に、本題である「労働力も亦商品化されたる商品生産（営利的生産）の社会」、つまり資本主義社会のメカニズムの解明に移っている。商品の二要因（使用価値と価値）とそれに対応する労働の二重性（具体的有用労働と抽象的人間労働）に言及したのち、「貨幣が生ずるに至る迄」の価値形態論および貨幣が「資本に転化する」プロセスが説明される。

続いて剰余価値発生の根拠が説かれる。労働力が商品化されている社会では、資本家は労働力の価値、つまり「労働者に必要なる生活資料—衣食住その他」を支払い、その使用価値（労働）を手に入れる。資本主義社会では労働力までもが商品

開催年	講師名(肩書)
1923	蠟山政道(東京帝大助教授)、平野義太郎(同左)、半田孝海(常楽寺住職)
1924	平野義太郎、藤森成吉(作家)、那須皓(帝大教授)、白石喜太郎(小県郡長)
1925	河合栄治郎(帝大教授)、河西太一郎(立教大教授)、高倉輝(文学士)、半田孝海
1926	河合栄治郎、猪間驥一(東京市政調査員)、半田孝海
1927	那須皓(帝大教授、農学博士)、蠟山政道、高倉輝、半田孝海
1928	渡邊庸一郎(帝大助教授)、松原一彦(大日本連合青年団)、丸山鈴志、半田孝海
1929	本位田祥男(帝大教授)、田澤義輔(大日本連合青年団理事)、半田孝海
1930	向坂逸郎(元九州帝大教授)、大島政敏(元帝大講師)
1931	平田良衛(プロレタリア科学研究所常任中央委員)、関口泰(東京朝日新聞社政治部長)、猪股津南雄(元早稲田大講師)
1932	長野朗(自治農民協議会)、山浦政(東部実科中学校長)、佐々弘雄(元九州帝大教授)
1933	横尾惣三郎(農民講道館長)、岡本利吉(日本農民共同学校長、純真学園)
1934	牧野智輝(経済学博士)、清澤冽(評論家)、半田孝海
1935	紀平正美(学習院大教授、文学博士、国民精神文化研究所所員)、谷中佐(上田蚕糸専門学校配属将校)、岡田温(帝国農会幹事)、半田孝海
1936	川原次吉郎(中央大教授)、中山武三(篤農協会主事長)、宮下周、半田孝海
1937	赤池濃(貴族院議員、前警視総監)、松原一彦、諸田技師(県農会)、半田孝海
1938	松本忠雄(外務省政務次官)、山浦貫一(読売新聞顧問)、三好武二(元大阪毎日記者、評論家)、宮下周、西村富三郎(県立御牧ヶ原修練農場長、県社会教育課係官)
1939	富田健治(長野県知事)、宮下周、栗林農夫(同盟通信社会部次長)、山浦国久(県社会教育課主事)、北原泰作(大日本連合青年団拓務課)

化されているから、一般の商品の買い手はその商品の価値（価格）を支払って使用価値を入手するように、労働力の買い手である資本家は、労働者に労働力の価値（生活資料の価格）を賃金として支払い、労働力の価値以上の価値を生み出す使用価値（労働）を手に入れる。そこに剰余価値発生の秘密があると説明される。

その上で、向坂の講義は「資本家の再生産行程」の分析に移る。自由競争を前提とした利潤追求は、一方で「必然的に生産機能の拡大、優秀なる技術の採用、商品価格の低下」を、他方で「労働賃金の減少、失業者の増大」を導き、その結果「今日に於ては失業と結び付いた処の絶対的の貧乏〔窮乏化〕」が生まれる。また、「無統制の生産」が行われる資本主義社会では、「生産過剰の現象が現われ、一般的恐慌が惹き起される」。

しかも現代は、資本主義が「最高度に発達した」「帝国主義の時代」である。「株式会社の制度」の導入によって、銀行と産業界が結びついた「金融資本の時代」に発展している。競争は国内ばかりでなく対外的にも行われざるをえない。対外的な競争は「関税政策、資本の輸出、移民の輸出等」によって行われるため、帝国主義の時代は「戦争の時代」にならざるをえない。金融資本によってもたらされる戦争と恐慌は、具体的には「欧州大戦」（1914-18年）、「昭和2年の金融恐慌」（1927年）、「1929年の半以降の」世界大恐慌として現れている。

聴講した青年の講義概要から見るかぎり、向坂の講義は、マルクスの『資本論』第1巻とレーニンの『帝国主義論』のエッセンスを要約する形で進められている。そして、「此の社会がどう云ふ風になって行くかは諸君自身が解決さるゝところである」という言葉で閉じられている。向坂が、唯物史観と「資本主義社会の機構」との関係や『資本論』と「帝国主義の時代」との関連をこの講義の中でどのように講じたかはこの講義概要からは知りえないし、いわゆる絶対的窮乏化論を肯定的に説明している点に向坂自身の『資本論』理解が垣間見られるとはいえ、この講義は、自由大学のそれに対して高倉輝が評価したのと同様に、「宣伝や扇動を目的とする講演会や演説会」とはその性格を異にしていたと見てよいであろう。換

言すれば、この講義はイデオロギッシュな「講演会や演説会」よりも「もっと深い知識を求める」青年たちの求めに応える講義であったといつてよい¹⁷⁾。

同時に、この講義概要をまとめた吉田重信の要約力についても確認しておくべきであろう。吉田は、その後1935年には青年団の東前山支部長、1937年には団長を務めることになるが、かれはこの「原稿の整理に当り、二三の本を参考にした」と断っている。具体的な書名は記されていないが、向坂の講義の要点を丹念に筆記し、経済学関係の著作などを参考にしながらその要旨をまとめたことは間違いない。コミュニケーション能力には、読む力、書く力、聴く力、話す力などが含まれているが、前三者を総合した優れた要約力と自由大学運動が掲げていた「自学自習」の姿勢が見られる点とに留意しておきたい¹⁸⁾。

5. マルクス主義をめぐる自由闊達な議論

ところで、向坂がマルクスの経済学を講じた1930年を間に挟む前後数年間は、青年団員の間にマルクス主義ないし社会主義思想が浸透していた時代でもあった。のちに講座派の論客になる法学者の平野義太郎、プロ科研究所の平田良衛、『労農新聞』の責任者であった労農派の猪俣津南雄らが郡連青の講師として招かれていることもこの時代の雰囲気伝えるものであろう。そういう空気を反映して『時報』史上にはマルクス主義をめぐる「自由」で「大胆」な議論が展開されている。

1930年の3月から4月にかけて、西塩田村では3回に亘る「農村講座」が開講され、多数の受講者が集まった。この講座に対して、伝聞に基づく次のような匿名の投稿が『時報』に掲載された。「この講座たるや農村講座の名の下にマルキシズムやアナキズムが講ぜられたとのこと。研究は結構ながら講座の本旨を誤らずマルキストやアナキストの養成たらざることを祈る」¹⁹⁾と。

これに対して、かつて自由大学の受講者で『自由大学雑誌』の購読者でもあった役場書記の黒坂勝が、直ちに反論の筆を執っている。この講座は「何色にも染め出されずに」「郷土を守る精神を培はんが為の試み」であったにもかかわらず、批判者はあたかも「目的と実際の研究とが相違して

るかの様にデマを飛ばしてある」。匿名氏は、「事物の末を見て其の本質を見究めざる処に対策の誤謬がある」ことに気づいていないのではないかと、と。

この農村講座の仕掛け人であった黒坂にとって、講座を開く理由は次の点にあった。「資本主義社会は如何なる機能を持ち、如何にして発展し、然して如何なる矛盾を持ってゐるか？」を真に把握せる者のみがこれに対する対策を持ち、農村更正の真の道を開くことが可能なのである²⁰⁾。黒坂がかつて参加したことのある自由大学の目標は、社会の「機能」や「発展」や「矛盾」を学びつつ、それを鵜呑みにすることなく自らの判断力に基づいてそれらを「真に把握」するところにあったから、彼の発言はそれを踏まえたものと見るができる。

匿名の投稿は別の反論も呼び起こした。創設期の青年団の時報主任で、のちに指摘する小作争議では指導的立場に立つことになる中澤多七は、匿名の青年を次のように一喝している。当の青年は「中庸の道」を歩むというが、結果として「反動化して社会の必然の進路を喰ひ止め様とあせる」ことに通ずる道が「青年の中庸道だとでもいふのか」。「農民も一の社会構成の最重要階級である以上、その研究は直ちに社会科学の研鑽から始めねばならぬことは、余りにも解りきったことではないか。然も社会科学とはプロレタリア社会科学以外の何者でもない。…農村講座の最初に於てそれに触れたことは、当然であり、且つ耶かの無理もなかったことなのである²¹⁾。

黒坂同様、中澤も「社会科学の研鑽」を重視しているが、その「社会科学」は中澤が唯一絶対と考えている「プロレタリア社会科学」に限定されている。これは、さまざまな人文・社会科学の批判的な学びの中から、自己の社会認識を創り出していこうという立場とは異なるという点を確認しておきたい。

この中澤の批判に対して、その論調に青年一般を「反動視」する視点と公式主義的な姿勢を感じ取った別の匿名の青年からは、以下のような反批判が寄せられた。そもそも「心ある青年は現代社会生活の含む欠陥を意識し合理的な社会を得たいと希求して」いる。中澤の批判にはその認識が

欠落している。地域のあちこちで開催される講演会や演説会に出席してこの青年が感じることは、むしろ「壇上に立ち自身から社会運動の闘士と任ずる人が果してどれ程に資本主義経済機構の認識を把握」しているかという疑問である。その上で、この青年は「マルクスが彼の生存してゐた時代を基礎として作り出した所説に今日でも固執執着し既に学説と時代の生活と幾多の齟齬を生ぜしめてゐるにも拘らずその古い学説に頑強に執着しその更改を省みない固陋な態度」を厳しく批判している。したがって、この青年によれば、中澤は、「マルクス主義にも発展が必要」であるにもかかわらず、「その更改を省みない固陋な」「原始マルクス主義者²²⁾」ということになる。

もちろん中澤も黙ってはいない。中澤によれば「マルクスの功績」は「唯物史観と剰余価値説の二大発見にある」。本稿でもすでに紹介しておいたが、「吉田君の講演記事」つまり向坂逸郎の講義内容からもそれは明らかではないか、というのである。唯物史観によれば、「社会制度は一切の経済関係によって決定される。資本主義の発生も発展も崩壊も弁証法的唯物史観によって完全に説明できる」。「資本主義的経済関係によって如何に剰余価値は発生するか。発生と成長と消滅の科学的な社会理論の確立はまことにマルクスに依ると言っても過言ではない²³⁾。

この一連のマルクス主義をめぐる批判と反批判は、自由大学運動の展開の過程で問題となったブルジョアカルトとプロレットカルト、「思想の自由」と「思想からの自由」をめぐる議論とも重なる問題を孕んでいる²⁴⁾。詳細は別稿に譲るが、簡単に触れておこう。

まず、「農村講座」で「マルキシズム」が講ぜられたことをもって、それを直ちに「マルキスト」の養成講座とみなす匿名の青年の主張に対する黒坂の反論の趣旨を再確認しておこう。黒坂が主催した「農村講座」は、「我々の求めてゐるものと異つたものを與へられてゐる淋しき空虚な感じ」、つまり現状肯定的な社会認識（ブルジョアカルト）を各自で払拭するために開かれたものであって、マルクスを研究の対象としたのも、「我々の求めてゐる」現状批判的な社会認識を学ぶためであって、直ちにマルキストになるためで

はない。当時の世間の常識からすれば、マルクスの社会認識を取り上げること自体が、マルクス主義者を養成することと同一視されがちであった。これに対して黒坂は、各自が「淋しき空虚な感じ」を払拭して社会改造の「対策」を考えるための一手段として、マルクスの社会認識を研究対象に選んだのであって、「目的と実際の研究」との間に齟齬はないというのである。世間の常識の殻に包まれたブルジョアカルトの立場を批判しつつ、自らの社会認識を創るためにこの講座を企画した黒坂からすれば、匿名氏の講座開設「目的と実際の研究」内容に関する認識自体がずれており、「デマ」に過ぎないと応じたわけである。

これに対して、中澤の批判は少々趣きが異なる。まず、中澤は「中庸の道」が「反動化」する可能性を孕み、階級や社会の研究は「社会科学の研鑽」なしにはありえないと判断しているが、それらは的を射た指摘といえる。また、マルクスの剰余価値説は、向坂の講義概要でも見たように、商品化された労働力の価値とおりの交換に基づいて、「資本主義的経済関係によって如何に剰余価値は発生するか」を説いた「社会理論」であるといつてよい。しかし、それが疑問の余地なく「科学的」に論証されているかどうかは、それを研究する各自の検討に委ねられている。まして、歴史的な各社会の「発生と発展と崩壊」の必然性を予測したマルクスの唯物史観は、論証された「科学的社會理論」といえるかどうかは問われなければならない。中澤の断定でかたづく問題ではない。

この点は、すでに触れたように、向坂の講義でもそれほど明確ではなかった。それでも向坂は、講義を閉じるに当たって「此の社会がどう云ふ風になって行くかは諸君自身が解決さるゝところである」と述べていた。マルクスの「社会理論」を講じた向坂が、それを「どう云ふ風に」判断するかは「諸君自身が」決定することだと伝えていたかどうかは明らかではないが、少なくとも中澤のような断定で済ましていたとは思えない。中澤の議論は、マルクス主義的なプロレットカルトを唯一絶対の基準とするイデオロギッシュな批判と反批判にとどまっているのである。

これに対して、中澤批判を行った一青年は、最初の匿名の批判者のような反マルクス主義者では

ないという点には注意する必要がある。この時期の青年たちの思想潮流を左右に単純に二分して済ますことはできない。ブルジョアカルトがさまざまなヴァリエーションをもつように、ブルジョアカルトを批判するプロレットカルトもマルクス主義のそれだけではないし、マルクス主義者の中にも「固陋な」者もいれば、「マルクス主義にも発展が必要」と考える青年も存在していた。1930年前後には、「現代社会生活の含む欠陥を意識し合理的な社会を得たいと希求」する「心ある青年」は決して少なくはなく、彼らは、ブルジョアカルトと一枚岩的な社会認識とが拮抗・対立する状況の下で、重層的な青年団活動を通じて両者を相対化しながら、自らの社会認識を鍛える機会をもっていたのである。

6. 2・4 事件前後の青年団活動

ところで、西塩田村といえば、村の最大の地主であった前山寺と小作人との間の小作料を巡る「争議」が想起される。この西塩田村小作争議²⁵⁾は、向坂逸郎の講義が行われた1930年11月からじつに1年5ヶ月の長期に亘って展開された。しかし『時報』紙上では、この争議の期間中、マルクス主義を巡って行われたような表立った議論は行われなかった。小作争議自体が村内の生々しい階級対立によって生み出されたものであり、『時報』の投稿者も双方の当事者に気を使いながら静観する以外になかったものと思われる。

争議期間中の1931年9月に満州事変が始まり、争議が妥協で終結した1932年3月以降も、5・15事件、翌年の2・4事件へと時代は大きく右への傾斜を強めていく。『時報』の研究にとって（もちろんそれに限らず一般的に歴史研究に当てはまることであるが）、1930年代初頭は自由な言論が許された最後の機会、岐路に当るようにみえる。

じっさい『時報』研究に先鞭をつけた鹿野政直は、1932年までの各村の『時報』の論説を丹念に渉猟した研究の末尾を、次のような印象的な一文で締め括っている。「あれほどさまざまな模索の結果が、自力更生へとなだれをうったとき、青年たちは、ひらこうとした未来を、みずからの手とぞしたといえた。そうしてそれは同時に、日本の前途をとぞすことをも意味した」²⁶⁾。

確かに、鹿野の指摘するように、1933年の2・4事件前後の農村の状況は、「伝統的な価値への依拠」や「自力更生という名の自己改造」へと急速に旋回する分岐点であったことを大枠で否定することはできない。しかし、先の引用文中にあるように、等し並に「青年たちは、ひらこうとした未来を、みずからの手でとどした」と言って済ませることができるかどうか、それは吟味してみる値打ちのある課題である。

2・4事件の1年9ヵ月後の1934年11月にも、郡連青の恒例の講習会が開催された。すでに触れたように、講師の一人に清澤冽が招かれ9時間に亘る講義を行っている。その講義概要²⁷⁾をまずは手掛かりとして、2・4事件後の青年たちの声を拾ってみよう。

清澤はまず、2・4事件後の当時の社会が、「言論」「文筆」とともに「自由を束縛」されている点を確認する。こういう閉塞感漂う「言論の圧迫」された時代だからこそ、「一応は他の意見も聴いて、以って他山の石とし、然る後に反駁すべきは反駁し、賛成すべきは賛成する」という態度が特に必要である、というのが清澤の講義の強調点である。

なぜ清澤はその点を強調するのか。もともと「進歩」とは「各方面の意見が集り、それが統一」されてはじめて可能となる。したがって「言論の自由」なくして「健全なる進歩」を望むことはできないが、今日のような不自由な時代にあっても「反駁すべきは反駁」するという態度を持ち続けなければ、「数が少くとも正しい場合がある」という社会にとって極めて重要な事実を実証できないからである。

次に清澤は、当時はやりの「国粹主義」や「危険思想」という言葉を採りあげる。「国粹主義」とは「外国に仮装(想)敵国でも作って置かなければ、うまく統制の取れない処に」生まれた「日本の特殊な道徳」に過ぎない。他方「危険思想とは時の支配階級に反対する」思想のことで、支配階級にとっては「危険な」思想であろうが、それだけのことであって一概に誤った思想とは言えない。そもそも「正しいとは、輿論を恐れる事でもなく、日本古来の精神に従ふ事でもなく」「その行動に依って良き社会が出来る様になる」ことで

ある。したがって、正しいとは「支配階級の考へてあるよりももっと先の」ことである。

それに続けて「窓ヲ開ケヨ」という言葉を紹介する。これは「自分の考への中に閉籠って仕舞っては」いけないという意味である。「形を破る」ことが必要である。「従来の習慣をそのままに継承してしまっはいけない。青年は陋習を破るべく努力してこそ、本当に次の時代を承継ぐ」ことができる。

最後に清澤は、批判的精神のすすめを説いて長時間の講義を締め括っている。「私達の生活態度については『出来る度けものを信ずるな』と言いたい。一応は疑ってかゝれ、単純に物事を信じて仕舞って(は)、何うも批判的でなくて困る」。

100人を超える青年たちを前にした9時間に及ぶ講義ではあるが、この講義概要からは、自由大学の講義終了後に受講生たちが車座になって講師の話の聞いている場面を髣髴させるようなそんな雰囲気伝わってくる。そしてこの講義は、批判的な思考と「輿論を恐れ」ず自己決定をめざした自由大学の精神と重なる内容をもつことも明らかであろう。

先に紹介したマルクス主義者の中澤多七に言わせれば、清澤のこの講義は、リベラリズムの立場を一歩も踏み出しておらず不十分なものと批判するかもしれない。しかし、この清澤の立場は、中澤が批判した「反動化」に流されていく「中庸の道」でもなければ、鹿野が批判した「伝統的な価値への依拠」や「自力更生という名の自己改造」に収斂する道でもないことは極めて明確である。

この清澤の講義の前後に、つまり1933年の2・4事件後にも、『時報』紙上には一方でブルジョアカルトにも「固陋な」マルクス主義にも一定の距離を置きながら、しかも「反動」にも単なる「自己改造」にも流されない青年たちの論説が掲載されている。例えば、京大滝川事件とナチスによる大学教授や官吏らの公職追放事件とを批判的に論評した上で、「ナチスは又最近に於て非常に沢山の本を焼いたそうだ。読書の自由、書状の自由を共に失ふ独逸国民の不幸よ。モダン焚書坑儒、…なんと歴史二千年の逆転か？」²⁸⁾という論説が紙上にあらわれている。また「青年の悩み」

と題する一論説の中には、1920年代中葉の創刊時の青年らしき気迫は、10年後の現在薄らぎつつあるとの慨嘆とともに、左右両翼の思想に「触れる事なく所謂中庸の路なるを進行すれば良い」と時代が「強制」することは、「進取と努力の無意味を感じさせるのみであると思ふ」²⁹⁾との断言も登場している。

とはいえ、時代のファッション化とマルクス主義の退潮は、青年団幹部の一人をして「青年の思想に一大転向をしたではなきか」と嘆かせるに充分なほど右旋回をしていたのも事実であった。清澤が招かれた第12回の郡連青の講習会に参加した瀧澤光人は、青年団の保守化に愕然としながら次のように記している。「満州事件又以後の5・15事件、血盟団事件等よりの影響もあり」「昔日の2・4事件前の状態と対比する時、其の急転換に驚き入るのである」。それをよしとしない瀧澤は続ける。「一考すべきは信州青年の気質の表現でありはしないか、一つの事を最後迄押通すと云ふ気魄なき信州青年の頼りなさの現れかも知れない」³⁰⁾と。

それでも「気魄なき信州青年の頼りなさ」を脱却する一幕もあった。青年たちの一部には、時代に棹さして右に舵を取ることにあらがう「気魄」が、消え入ることなくなお内包されていたのである。それが、県連青の綱領改正提案に対する激しい抵抗であった。

すでに触れたように村青年団にとって県連青は日常的には決して近い存在ではなかったが、県連青が綱領の改正を提案した際には、全县から「反動的、官僚的な又退嬰的な綱領案に対し相次いで反対の烽火」³¹⁾が挙げられた。それは村や地域の青年団のめざす方向性と県連青の綱領改正案との間に埋めようもない溝があったからである。1929年2月に制定された当初の綱領は、以下の三項からなっていた³²⁾。

- 一、吾等は自主的精神に立脚して社会事象の研究と厳正批判とをなし更に之が実践とにより以て社会的教養を積み社会文化の進展を期す。
- 二、吾等は社会進化の過程に於ける青年独自の立場を明確に認識し青年の歴史的使命を遂行せんことを期す。

三、吾等は団員各自の人格の向上を図ると共に団員相互の訓練により団体的精神を養ひ以って社会人としての遺憾なきを期す。

これに対して、1937年5月に発表された綱領案³³⁾は以下のとおりである。

- 一、我等は青年の友情と愛郷の精神によりて団結したる淳美一体の高揚と充実強化に努め連絡輔導の完きを期す。
- 一、我等は自主自立の精神に基き純真正義を旨とし勤労の美風を培ひ相互修練に努め一致協力経営済美の実を挙げむことを期す。
- 一、我等は心身の練磨により人格の向上を図ると共に社会的教養を昂め理想郷土の建設に寄与し以って国運の進展に尽さむことを期す。

現行の綱領と新綱領案とを比べれば、前者に掲げられていた「自主的精神に立脚し(た)社会事象の研究」「批判」「実践」や「青年の歴史的使命(の)遂行」などが後者では落とされ、替わって「淳美一体の高揚」「経営済美の実」など抽象的な文言が登場している。また「社会文化の進展」と結びついた「社会的教養」は、「国運の進展」と結びついて質的変容を遂げている。『西塩田時報』はこれに対して2号連続で巻頭言に批判的論説を掲げる。『「歴史的使命(の)遂行」なる語句がマルクスが用ひたものなるが故に是を修正しようとする事の狭量さ加減は、幽霊の正体見たり枯尾花の類であることも容易に肯ける」³⁴⁾。

「由来青年団は自主的な発展により青年の生命と力とを見出して居ったにもか、はずその自由を剥奪されとしたならば既でに青年団の存在は有名無実に終る」。「自主的精神の没却は長野県連青の歴史への冒瀆である」³⁵⁾。

しかしそれも一瞬であった。「歴史への冒瀆」というこの激烈な叫び声は、ほとんど同時に掻き消されることになる。翌8月号の巻頭では、前月7日に「北支事変」(日中戦争)が勃発したことが告げられ、「挙国一致の実を挙げる」ことが「国民としての責務」と説かれる。そして9月号には、「重大事局下に於ける軍事費の膨張、軍需関係産業の急速なる発展」が「正当なる国防の負担であるならば強ち声を大にす可きではなく、双手を挙げて賛成す可きである」との「巻頭言」に

とって替わる。もはやこれまでというところか。

しかし、その同じ9月号に、前年の5月にフィリピンのダバオに渡航した元団員の便りが掲載されている。しかもそれは現団員宛の私信で、わざわざ「皆様の一考察を煩し得れば幸甚の至り」と断った上での掲載である。

「その後大衆青年の思想や信念の動きは激しい変化を走りつゝあること、思ひますが、どんなに衆団の統一や結果を計つても、思想を同じうしようとしても結局は自己の信念の確立することが最も重大な事だと思はれます。つまりイタリヤやドイツの様に国粹思想で統一しようとしても、又ロシアの共産労農思想にて統一を計らうとしても、各自が充実し居ないと何の統一が見られるでせうか」³⁶⁾。

7. 『時報』の廃刊と自由大学精神のゆくえ

たとえそれが青年団の外部からの声にしか過ぎないとはいえ、1937年に至ってもなお、「国粹思想」にも「共産労農思想」にも安易に組しない立場を表明し、「自己の信念の確立」を通さずして「統一」を達成することの無意味を指摘した意見が掲載された点を無視することはできない。こうした声が本流となることはもはやなかったし、やがて『時報』の使命には、「村内報道機関」「青年団機関紙」と並んで「指導啓蒙機関」「村内輿論統一機関」が付け加わることによって³⁷⁾、「知る」権利を主張し「全村民の叫び」を掲載することをめざして創刊された『時報』は、自らの手を自らの首にかけることになる。

最後にその首を締め上げたのは、「新聞紙法による出版物」に1940年10月31日付けをもって「廃刊」を命じた国家の「宣告」ではあったが、それはむしろ瀕死の『時報』の死期を早めたに過ぎなかった。それというのも、「自由こそジャーナリストに興へられた特権と思ひし過去20年200号の時の歯車は国家的統制の下にのみ自由を許され」ている状態が続いていたからである³⁸⁾。

ならば自由大学の精神じたいも、「国家的統制の下」で息の根を止めてしまったのだろうか。確かに、活字を奪われた青年たちをはじめ地域の住民は、公的生活においては沈黙せざるを得なかった。しかし公権力は、公的沈黙は強いることがで

きたとしても、私的生活における意思表示まで沈黙させることはできない。信濃自由大学の理事の一人で、当時神川村の村長を務めていた金井正は、敗戦1年前の1944年に次のような文章を記している。

「自覚的—自己意識的トハ、自分ヲ立テルコトノ意識ダ。自己ヲ立テルトイフコトハ、ソレダケ自己ヲ他ヨリ区別シ他ニ対スル自己ノ依存関係ヲ断チ切り、之ヲ逆転シテソレダケ自主的ニ他ヲ決定シヨウトスルコトダ。他ヲ自主的ニ決定スルコトハ、即チ自分が自分ヲ決定スルコトニ外ナライ。コレガ即チ『自由』デアル。

実践ガ自覚的デアルトイフコトハ、故ニ実践ハ自由ナリトイフコトヲ意味スル。行為スルコトノ自由、行為シウルコトヲ行為スベキコトトシテ自覚シ、之ヲ実践スルトイフ自由ヲ意味スル」³⁹⁾。

社会的実践の自由はいうに及ばず、言論・表現の自由すら奪われていたアジア・太平洋戦争期間中に、金井は何を考へながらこれらの文章を書きつけたのであろう。自立とは、他との依存関係を断ち切り、自己決定できる状態を指す。他との依存関係の中には、文字通りの他者との依存関係のほかに、「輿論」や書物や報道機関との関係も含まれていよう。世論や著述やマスコミの言説を相対化し、自己決定できる状態を自由というのだが、今その自由を表現することも実践することも「国家的統制の下に」置かれている。今ある自由は、「行為シウルコトヲ行為スベキコトトシテ自覚」する自由にとどまり、その自覚を「実践スルトイフ自由」は限りなく制限されている。つまり、公的世界で表現や実践を自己決定する自由は閉塞状態にある。にもかかわらず、「自由」とは「行為シウルコトヲ行為スベキコトトシテ自覚シ、之ヲ実践スル」ことだという点を敢えて確認するのは何のためなのか。

その秘密を解く鍵が、敗戦1年後に金井によって公表された次の文章中にありはしないか。「日本の社会を民主化する必要は、ポツダム宣言を無条件に請け容れたから初めて生じたのではない。なるほど、連合国から考へれば日本の民主化は将来の戦争防止の一前提条件であつて、この責任を我國民に負担させるのは当然であらうが、我々日本人自身の立場からいへば、戦争の勝敗に係はら

ず、一日も早く国を民主化して住み心地よき国土となす必要はあったのである。ポツダム宣言と民主化との関係が余りに力説さるゝ傾向のあるのは甚だ不可解である」⁴⁰⁾。

戦後の自由と民主主義は、敗戦によってアメリカが与えたものだという考えが今に至っても存在する。ましてや当時は、進駐軍は解放軍でもあるという考えまであった。だが、自由と民主主義に基づく「住み心地よき国土」の建設は、「日本人自身の立場」はともかく金井自身の立場からすれば、戦中期から内在的、自覚的、自己意識的なものであった。つまり、「住み心地よき国土」を建設「スベキコトシテ自覚」する自由は戦中からあったし、金井はそう判断してきた。制約されていたのはその「自覚」を公的生活において「実践」に移す自由であった。総力戦体制下にあっても、金井は「行為シウルコトヲ行為スベキコトシテ自覚」する営為、つまり自己決定力の涵養という自由大学の精神を捨てなかつたばかりでなく、狭められた「行為スルコトノ自由」の追求をも断念することはなかつた。だからこそその精神は「戦争の勝敗に係はらず」、戦後ごく自然に蘇生したのであろう。

見られるように、金井正は、自由大学の精神および「社会的教養」の典型的な体现者であった。しかし、彼をこの地域の例外的な存在として片づけることはできない。なぜなら、上小地域において、少なからぬ数の「心ある青年」たちは、信濃黎明会や自由大学関係者との交流や、同心円的な修養・研究活動を重層的に積み重ねることを通じて、また『時報』の論説にコミットすることによって、多様な言説の中で社会認識を深める機会を自らのうちに取り込んでいたからである。

なお、本稿は「長野大学地域研究・一般研究助成」による研究成果の一部である。

注)

- 1) 詳しくは拙稿「自由大学運動の歴史的意義とその限界」『経済志林』〔法政大学〕第74巻第1・2号、2006年8月、173-77、180-88および194-98ページ参照。
- 2) 「自由大学は、地元『神川』くらいが取り上げてい

るだけである。もっと関心が示されていてもよいのではないかと思われるが、意外にも自由大学への対応は僅少である」。小平千文「地域社会と『時報』の発行——青年たちの社会改良(変革)の変遷」『信濃』第53巻第3号、2001年3月、187ページ。

- 3) 渡邊典子「1920~30年代における青年の地域活動——長野県神川村『路の会』による学習・教育を中心に」『日本教育史研究』第13号、1994年8月。なお、以下の2論稿も参照。「昭和恐慌期における青年層の学習活動——長野県小県郡神川村を事例として」『日本生涯教育学会年報』第14号、1993年11月、「ファシズム体制移行期における青年団運動——長野県小県郡を事例として」『人間研究』第30号、1994年3月。
- 4) 同前「長野県小県郡神川村における学習集団『路の会』について」『中等教育史研究』〔中等教育史研究会〕第1号、1993年5月。「長野県小県郡神川村の青年団活動——望月与十氏に聴く」『中等教育史研究』〔中等教育史研究会〕第2号、1994年5月。
- 5) 自由大学に関する研究論文については、長島編「自由大学関係文献目録」長野大学編『上田自由大学とその周辺』郷土出版社、2006年、巻末資料Ⅱを参照。
- 6) 「自大正9年9月至同11年5月 信濃黎明会記録」『長野県史近代史料編』第8巻(3)社会運動社会政策、1984年、449-463ページ。
- 7) 佐々木敏二「長野県における社会運動と自由大学運動」『自由大学研究』第7号、1982年10月、3ページ。前掲拙稿1) 189-91ページも参照。
- 8) 「創刊の辞」『青木時報』創刊号、1921年5月。
- 9) 清水生(清水袈裟信)「時報創刊に際して」『神科時報』第1号、1924年11月。
- 10) 小林泰一「発刊に際して」『川辺時報』第1号、1925年6月。
- 11) 小松清「青年団の歴史をひもといて」『西塩田時報』第134号付録、1935年1月。
- 12) なお、ほぼ同じ時期に、青木村、浦里村、室賀村、泉田村、川辺村の間には川西北部五ヶ村連合青年団が、また神科村、豊里村、殿城村と旧真田町に合併することになる本原村、傍陽村、長村の6村の間には東北連合青年団が設立されている。また、神川村、豊里村、殿城村では三ヶ村連合修道講習会も開催されている。例えば『神川』第74号(1933年1

- 月)には、その第7回の開催予告が掲載されている。
- 13)『西塩田時報』における表記は、それぞれ山田わか子、金子茂となっているが訂正した。
- 14) 桐生悠々(桐生政次)の講演会は1929年2月に開催された青年団総会後におこなわれているが、やがて満州事変下の1933年8月に、桐生はジャーナリズム史上よく知られた社説「関東防空大演習を嘆く」を書き、ペンの方でラディカルな軍部批判を行うことになる。その点からすれば、この時の講演内容に興味が惹かれるが、それを伝える記事は残念ながら存在しない。
- 15) 富田隆順『反核平和運動に捧げた半生——半田孝海の生涯』上田小県近現代史研究会ブックレット14、2007年、14-15ページ参照。ただし、一部訂正を施したほか、肩書については塩田庄兵衛編『日本社会運動人名辞典』(青木書店、1979年)、『長野県歴史人物大事典』(郷土出版社、1989年)、『朝日人物事典』(朝日新聞社、1990年)、秦郁彦編『日本近現代人物履歴事典』(東京大学出版会、2002年)などを参考に加筆修正してある。
- 16) 吉田重信「資本主義社会の機構 [講義の概要]」『西塩田時報』第86号(1931年1月)、第88号(同年3月)、第91号(同年6月)所収。
- 17) 高倉テル「自由大学運動の経過とその意義——農村青年と社会教育」『教育』第5巻第9号、1937年9月。引用は『タクラ・テル名作選』第5巻、理論社、1953年、305ページ。
- 18) もちろん、そうした評価を一般化することはできない。向坂の講演筆記は、例えば『神科時報』や『神川』などにも掲載されているが、長時間の講演を整理し要約する受講者の能力にはばらつきがある。『神科時報』第75号(1930年12月)、『神川』第44-45、47、52-53号(1931年2月~11月)参照。
- 19) 「時報直言」『西塩田時報』第83号、1930年10月。
- 20) 黒坂勝「農村講座について」『西塩田時報』第84号、1930年11月。なお、西塩田村の自由大学受講者には、黒坂のほか『時報』創刊時に西塩田小学校の校長を務めていた六川静治、手塚支部の金沢重威があり、『自由大学雑誌』の「発送簿」には六川、黒坂のほか初代青年団長の樋口秀美、のちに方面委員を務めた宮沢兵部、小学校教諭の佐藤知、今井謙郎、滝沢勇らの名が記されている。
- 21) 中澤多七「青年に與ふ」『西塩田時報』第85号、1930年12月。
- 22) 一青年「中澤多七氏の『青年に與ふ』の記事を拝読して」『西塩田時報』第86号、1931年1月。
- 23) 中澤多七「批評に答えて」『西塩田時報』第93号、1931年8月。中澤は「一青年」の反論に直ちにこの回答を用意しているが、「編輯の都合」でその掲載は半年以上遅れた。
- 24) 詳しくは前掲拙稿「自由大学運動の歴史的意義とその限界」の183-88ページを参照。
- 25) 西塩田の小作争議については、以下を参照。タクラ・テル「長野県西塩田村小作争議」『赤旗日曜版』1964年2月2日~4月19日連載。西田美昭編著『昭和恐慌下の農村社会運動——養蚕地における展開と帰結 御茶の水書房、1978年、第5章第2節。上小農民運動史刊行会編『長野県上小地方農民運動史』1985年。なお、以下の本論を構想するに当たって、西田編著前掲書の第5章第3節および第4節から大いなる示唆を与えられた。記して感謝したい。
- 26) 鹿野政直「青年団運動の思想——長野県上田・小県地域の青年たちと農村受難の想念」『大正デモクラシーの底流』NHKブックス192、1973年、154ページ。
- 27) 東川廣太郎「清澤冽先生講演筆記要項」『西塩田時報』第135-136号、1935年2月-3月。
- 28) 小松實「自由の転落」『西塩田時報』第117号、1933年8月。
- 29) 杉山生「青年の悩み」『西塩田時報』第128号、1934年7月。
- 30) T生〔瀧澤光人〕「郡団幹部修養講習会に出席して」『西塩田時報』第134号、1935年1月。
- 31) 「青年団便り」『西塩田時報』第163号、1937年6月。
- 32) この長野県連合青年団綱領は、『西塩田時報』第134号(1935年1月)の附録(西塩田青年団創立15周年記念号)に、大日本連合青年団の「青年団綱領」とともに掲載されている。なお、山浦国久『長野県青年団発達史』信濃毎日新聞社、1935年、107-108ページ参照。
- 33) 注31の「青年団便り」の記事中にこの綱領案の全文が掲載されている。
- 34) 金井〔好衛〕「綱領問題を繞って(巻頭言)」『西塩田時報』第163号、1937年6月。

- 35) 「巻頭言」『西塩田時報』第164号、1937年7月。
- 36) 「北支事変と国民の覚悟」『西塩田時報』第165号、1937年8月。「巻頭言」および「南洋に活躍する君の懐しき便りに接して」『西塩田時報』第166号、1937年9月。ただし、最後の「便り」はダバオからの便りそのものであって、それに「接して」書かれたものではない。
- 37) 「青年団便り」『西塩田時報』第183号、1939年2月。
- 38) 「“時報200号”をひもといて」『西塩田時報』第200号、1940年7月。
- 39) 金井正「実践論ノート」1944年（大槻宏樹編『金井正選集——大正デモクラシー・ファシズム・戦後民主主義の証言』1983年、266ページ）。
- 40) 金井正「『科学的』『民主的』」復刊『神川』第2号、1946年9月。